大林Ｂ遺跡・長五郎林Ｂ遺跡（第２次）
発掘調査報告

２０２２（令和４）年２月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

１．本書は、令和２年度に実施した県営かんがい排水事業有爾中・明星地区に伴う大林Ｂ遺跡及び長五郎林Ｂ遺跡の工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．工事立会調査地は、三重県多気郡明和町有爾中に所在する。

３．工事立会調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。現地調査から報告書作成に至る経費は、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。

４．工事立会調査の体制は次のとおりである。

工事立会調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課　主査 森川常厚　主任 元座範子
工事立会調査期間　令和２年12月16日～17日（大林Ｂ遺跡）
令和３年２月18日～19日（長五郎林Ｂ遺跡）
工事立会調査面積　23㎡（大林Ｂ遺跡）
35㎡（長五郎林Ｂ遺跡）

５．現地での図面作成は調査研究１課職員により、写真撮影は工事立会調査担当者による。

６．本書の執筆は元座及び森川が行い、編集は森川が行った。

７．本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている（令和３年４月５日三総合地第１号）。調査区位置図に使用した事業計画図は三重県農林水産部の提供による。

８．本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第Ⅵ座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。

９．土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。

10．調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

目　　次

Ⅰ．前言 ……（元座範子）… 1

１．調査に至る経緯 …… 1

２．調査の経過 …… 1

３．調査の概要 …… 1

４．文化財保護法に関する諸手続き …… 1

Ⅱ．位置と環境 ……（森川常厚）… 2

Ⅲ．大林Ｂ遺跡 ……（　〃　）… 6

１．層序 …… 6

２．遺構 …… 9

３．遺物 …… 9

Ⅳ．長五郎林Ｂ遺跡 ……（　〃　）… １０

１．層序 …… 10

２．遺構 …… 10

３．遺物 …… 14

Ⅴ．結語 ……（　〃　）… １５

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　大林Ｂ遺跡調査区平面図 …… 6
第５図　大林Ｂ遺跡調査区土層断面図 …… 6
第６図　大林Ｂ遺跡遺構出土遺物 …… 7
第７図　大林Ｂ遺跡包含層出土遺物 …… 8
第８図　長五郎林Ｂ遺跡調査区平面図 …… 11
第９図　長五郎林Ｂ遺跡調査区土層断面図 …… 11
第10図　長五郎林Ｂ遺跡出土遺物 …… 12
第11図　昭和23年撮影の空中写真 …… 16

写　真　図　版

写真図版１ …… 大林Ｂ遺跡調査前風景
…… 大林Ｂ遺跡調査区北半全景
…… 大林Ｂ遺跡調査区南半全景
写真図版２ …… 大林Ｂ遺跡出土遺物
写真図版３ …… 大林Ｂ遺跡出土遺物
写真図版４ …… 長五郎林Ｂ遺跡調査区南部全景
…… 長五郎林Ｂ遺跡調査区西部全景
写真図版５ …… 長五郎林Ｂ遺跡出土遺物
写真図版６ …… 長五郎林Ｂ遺跡出土遺物

表　目　次

第１表　大林Ｂ遺跡遺物観察表 …… 7
第２表　長五郎林Ｂ遺跡遺物観察表 …… 13

Ⅰ．前　言

１．調査に至る経緯

県営かんがい排水事業有爾中・明星地区の事業は、大林Ｂ遺跡を貫き、長五郎林Ｂ遺跡に隣接する。これらの取り扱いについて三重県農林水産部及び伊勢農林水産事務所と協議を重ねた。その結果、事業に先立ち、確認調査を行ったところ、大林Ｂ遺跡の一部に遺構・遺物の包蔵が確認され、長五郎林Ｂ遺跡では、遺跡範囲が事業地の一部に拡大することが確認された。この結果を基に、伊勢農林水産事務所と協議を続けた結果、用水管設置時に工事立会による発掘調査を実施し、記録による保存調査を行うこととなった。

なお、長五郎林Ｂ遺跡については、明和町と協議のうえ、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更の手続きを行った。また、平成９年度に宮川用水の改修事業に伴い実施された調査を第１次調査とし、今回を第２次調査とした。

２．調査の経過

調査は大林Ｂ遺跡から開始した。調査地の現況が道路であるため夜間の安全確保が必要であり、調査区を分割し、１分割分につては、即日調査を終え、埋め戻しまで完了するかたちで実施せざるを得なかった。

長五郎林Ｂ遺跡の調査は、大林Ｂ遺跡の調査終了後、工事が長五郎林Ｂ遺跡に及ぶまでの２ヶ月間の間隔を空けて開始した。掘削深が２ｍを超える地点もあり、崩落に留意しながらの作業となった。

３．調査の概要

表土及び包含層は重機を用いて掘削を行い、遺構検出・遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は、全体平面図及び土層図を1/20で、当センター職員による手測りで作成した。

写真の撮影には、一眼レフデジタルカメラを用いた。遺構写真は、ニコンD3300で撮影し、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いた。遺物写真は、ニコンD800Eを用いた。

なお、大林Ｂ遺跡については、前述した事情から調査区全体を通した写真撮影は実施できなかった。

４．文化財保護法に関する諸手続き

（１）県文化財保護条例第48条

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

大林Ｂ遺跡

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知
平成30年７月６日付　勢農第3181号

三重県知事あて三重県教育委員会教育長通知
平成30年７月13日付　教委第12-4041号

長五郎林Ｂ遺跡

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知
令和２年10月20日付　勢農第3414号

三重県知事あて三重県教育委員会教育長通知
令和２年10月29日付　教委第12-4138号

（２）文化財保護法第100条第２項

「埋蔵文化財の発見・認定通知」

松阪警察署長あて三重県教育委員会教育長通知

大林Ｂ遺跡

令和３年１月12日付　教委第12-4422号

長五郎林Ｂ遺跡

令和３年３月17日付　教委第12-4431号

（３）文化財保護法第95条第１項

「周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」

長五郎林Ｂ遺跡

三重県教育委員会教育長及び明和町あて三重県埋蔵文化財センター所長通知
令和３年１月18日付　教埋第265号

三重県埋蔵文化財センター所長あて三重県教育委員会教育長通知
令和３年１月18日付　教委第12-4224号

（元座）

Ⅱ．位置と環境

大林Ｂ遺跡（１）と長五郎林Ｂ遺跡（２）は、200ｍの間隔を空け隣接して所在する。両遺跡は丘陵地帯の北端部に立地する。この丘陵は玉城丘陵と呼ばれる。巨視的には紀伊山地の一部で、その北東端を構成するものである。西南日本内帯の最南部に位置し、日本列島を東西に貫く中央構造線のすぐ北側である。このため、深層風化を受けた領家帯の花崗岩類で丘陵が構成され、丘頂部の定高性は不明瞭で無数の開析谷が発達する特徴を持つ[①]。当地も東から西へ向けて深い開析谷が入り、それが北西方向と南西方向に分かれ、それぞれ開析谷の頂部に至っている。大林Ｂ遺跡は、その分岐点に位置し、東面する丘陵裾野の緩斜面で、現在は主に畑として利用されている。長五郎林Ｂ遺跡は、北西方向へと枝分かれした開析谷の最も奥に所在する。南東に面した丘陵裾野の緩斜面に位置し、現況は主に畑である。

長五郎林Ｂ遺跡の周知は比較的新しく、宮川用水の改修事業に伴う埋蔵文化財の調査で平成９年度に新発見されたもので、土師器の焼成坑等が確認されている[②]。その際に尾根の反対側で従来から周知されていた長五郎林遺跡を「長五郎林Ａ遺跡」（３）、新発見されたものを「長五郎林Ｂ遺跡」として整理し、周知されることとなった。さらに今回の調査で、長五郎林Ｂ遺跡の範囲が西面の緩斜面に拡大することが確認されている。なお、この遺跡が望む開析谷の奥部には、残土の盛土があり植樹されている。このため、本来の地形が判別し難い状況である。

両遺跡の立地する丘陵には合戦田古墳群（４）や垣場古墳群（５）、長五郎林古墳群（６）の小規模な円墳が密集する。これらを含め玉城丘陵は県内でも有数の古墳密集地帯である。近隣には愛場古墳群（７）、丸山古墳（８）、世古古墳群（９）、天王山古墳群（10）、カゴ山古墳群（11）があり、神前山古墳群（12）の神前山１号墳（13）は、昭和47年の発掘調査の結果、全長40ｍの造出を持つ帆立貝式前方後円墳であり、周囲を圧倒する規模であることが判明している。明治38年には画文帯神獣鏡の出土も伝えられ、倭王権との直接の関連が考察されている[③]。古墳は玉城丘陵北方に広がる明野台地にも分布しており、織糸古墳群（14）、塚山古墳群（15）、史跡坂本古墳群（16）、明星古墳群（17）等、多数の群集墳が知られている。なかでも坂本１号墳（18）は、全長38ｍの前方後方墳で金銅装頭椎大刀が副葬されていた。間接的ではあるが斎宮造営との関係が注目されている[④]。

明野台地には有力な集落跡や官衙等も所在する。史跡斎宮跡（19）は斎王の祭祀を司る特異な官衙として全国唯一のものである。その斎宮への土器供給地として注目される北野遺跡（20）からは、６世紀から８世紀までの200基以上の土器焼成坑が検出されている[⑤]。この他にも土器焼成坑と工房等の状況が分かる史跡水池土器製作所跡[⑥]（21）をはじめ明野台地では多数の土器焼成坑跡が発掘されている。近隣には堀田遺跡（22）、戸峯遺跡（23）、古堀遺跡（24）等多数の土器焼成坑を検出する遺跡が密集し、令和３年３月末現在で596基が検出されている。この数値は県内で突出するもので、その平面形態の特徴を勘案すれば全国的に見て例のない地域といえる[⑦]。

大林Ｂ遺跡や長五郎林Ｂ遺跡の所在する多気郡明和町有爾中には、神宮土器調製所（25）があり、現在も神宮で使用する素焼きの皿類を製作している。有爾中は古代には「有爾郷」と称される地域で、神宮への土器調進は古代に遡るもの[⑧]とされる。

玉城丘陵には、平安時代の火葬墓が良好な状態で発掘された長谷町遺跡（26）も所在する。被葬者は火葬墓を営むことができる特定階層の若い女性とされる。被葬者が特定階層の若い女性となれば斎宮関係者の墓を想定したいところである。しかし、神宮関係の荒木田氏も候補にあがり、特定が困難[⑨]である。

この様に、この地域は古代より斎宮や神宮と密接な関係にあった地域である。なお、大林Ｂ遺跡と長五郎林Ｂ遺跡の間には有爾桜神社（27）が鎮座する。延喜式に記載のある由緒ある神社で、神明造の社殿を構える。天王祭に奉納する天王踊が伝わるが、「宇爾櫻神社かんこ踊り」として明和町の無形民俗文化財に指定されている[⑩]。（森川）

［註］

① 目崎茂和・岩田修二「Ｉ地形分類」『土地分類基本調査　松阪』三重県地域振興部地域振興課 1991

② 小山憲一「長五郎林Ｂ遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財調査報告Ｉ　外山遺跡・片落Ｃ遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000.3

③ 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告』明和町教育委員会 1973

④ 乾哲也『坂本古墳群発掘調査報告』三重県明和町 平成29年3月

⑤ 上村安生ほか『北野遺跡（第２・３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995.3

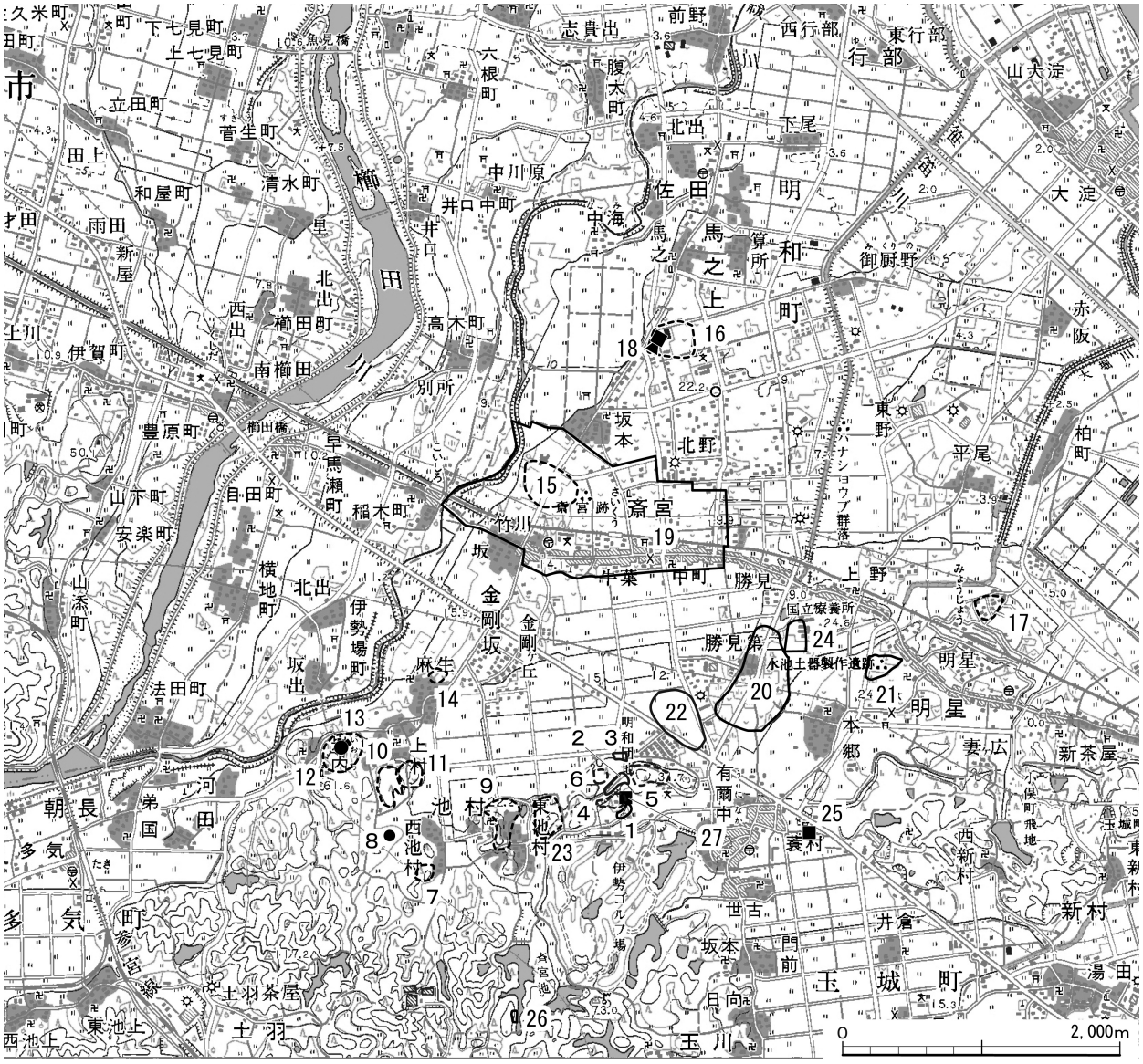
⑥ 明和町教育委員会・三重県教育委員会『斎王宮跡 - 広域市町村圏道路調査 - 』1977

⑦ 上村安生「明和町北野遺跡の土師器生産と神宮・斎宮」『瑞垣250』神宮司庁　令和３年秋季号

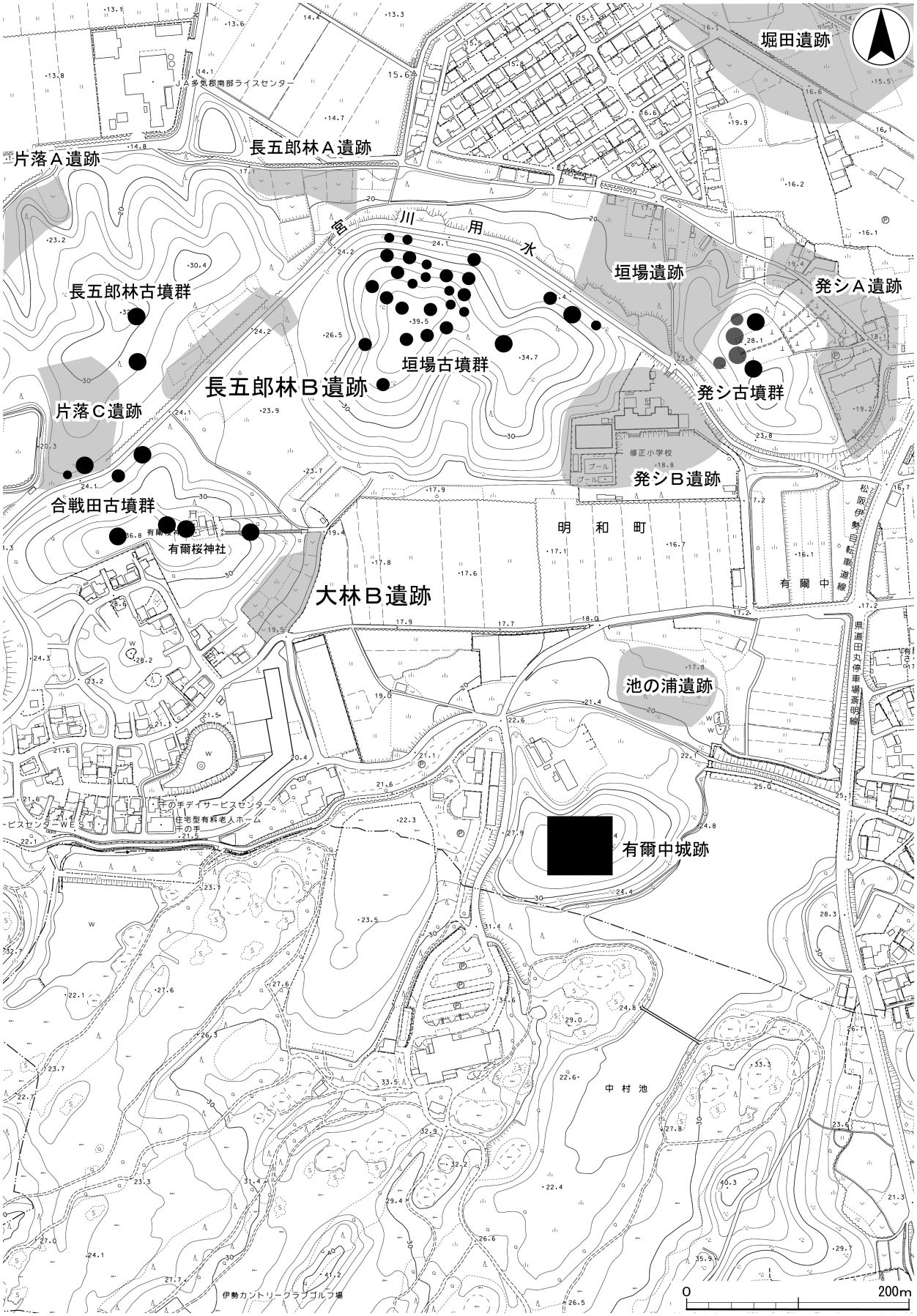
⑧ 小林　秀「中世後期における土器工人集団の一形態－伊勢国有尓郷を素材として－」『研究紀要第１号』三重県埋蔵文化財センター　平成４年３月

⑨ 小山憲一「長谷町遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2010

⑩ 明和町斎宮跡・文化観光課による。

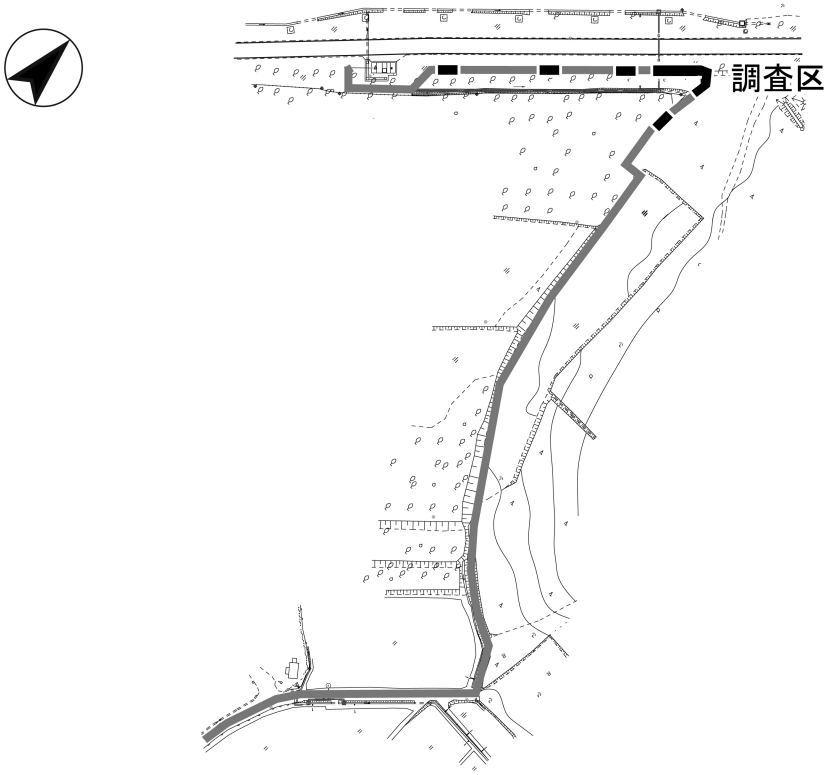


第１図　遺跡位置図（1：50,000）［国土地理院「松阪」1:50,000より］

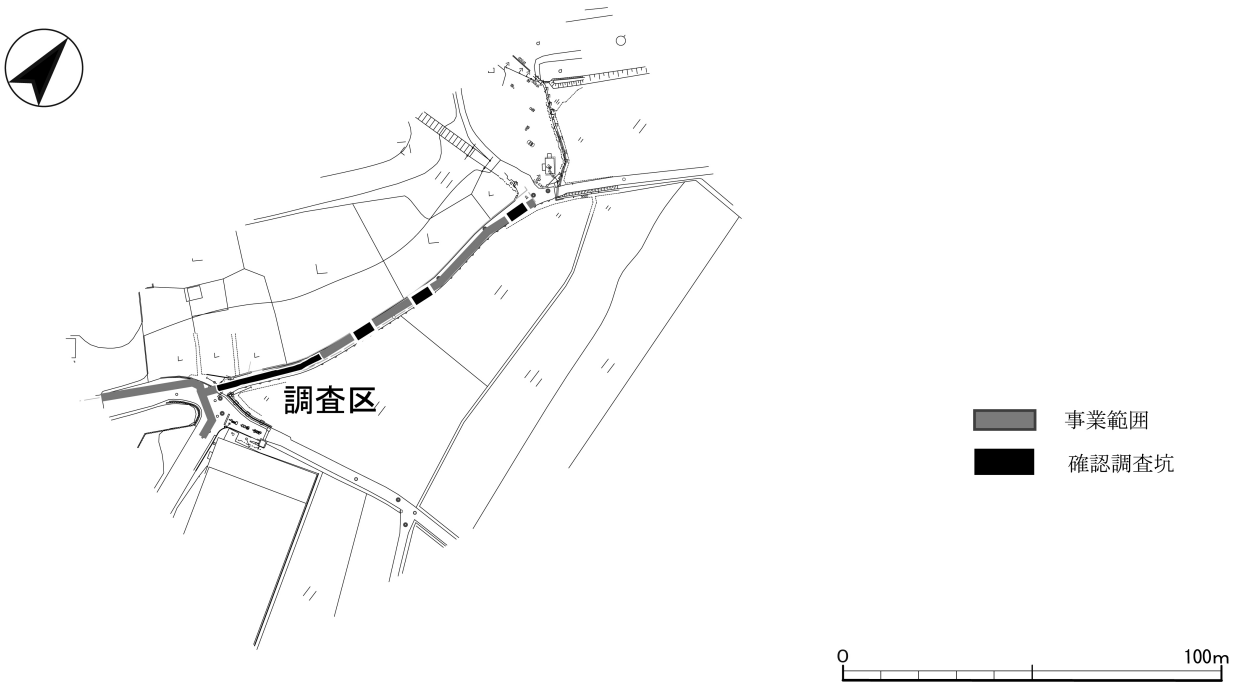


第２図　遺跡地形図（1：5,000）

長五郎林Ｂ遺跡



大林Ｂ遺跡



第３図　調査区位置図（1：2,000）

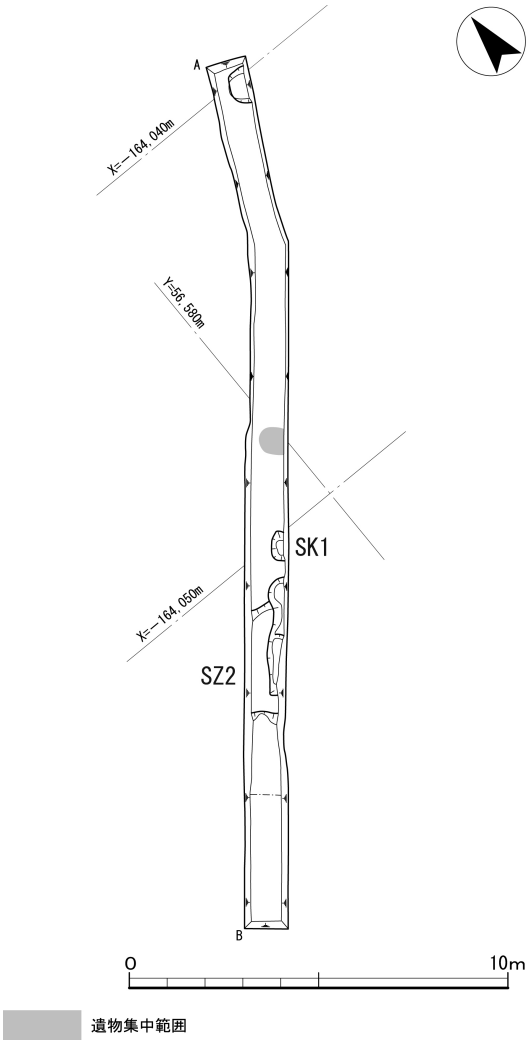
Ⅲ．大林Ｂ遺跡

僅か23㎡の狭小な調査区のこともあり、性格の明確な遺構の検出には至らなかった。しかし、奈良時代の土師器杯・甕等の遺物が比較的多量に出土している。

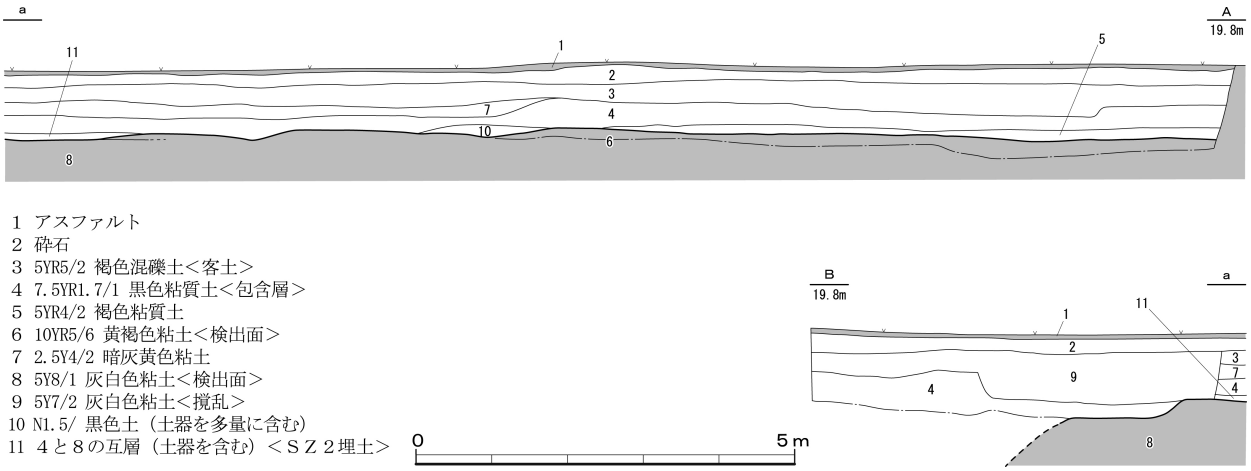
なお、道路であるため夜間の安全確保が必要であり、調査区を２分割し、１分割分につては、即日調査を完了するかたちで実施している。

１．層序

現況は狭小な農道で、舗装がされている。したがって、自然の微地形は把握しがたい状況である。表面はアスファルトで、その下60㎝までは、農道整備によると思われる造成された客土である。その下に厚さ20～30㎝の黒色粘質土層があり、これが包含層である。その下には薄い褐灰色粘土層があるが、調査区中央部で消滅することもあり、さらに下の黄褐色粘土層上面で遺構検出を行った。アスファルト下約90㎝～１ｍである。この検出面も調査区南部では消滅しており、さらに下層の灰白色粘土上面で遺構検出を行っている。この検出面も調査区南端では深度を深め地表下２ｍ以上に及ぶが、崩落の危険を回避するため完掘を断念した。結局、調査区南端は谷状の地形となり、湧水が特に激しい状態である。

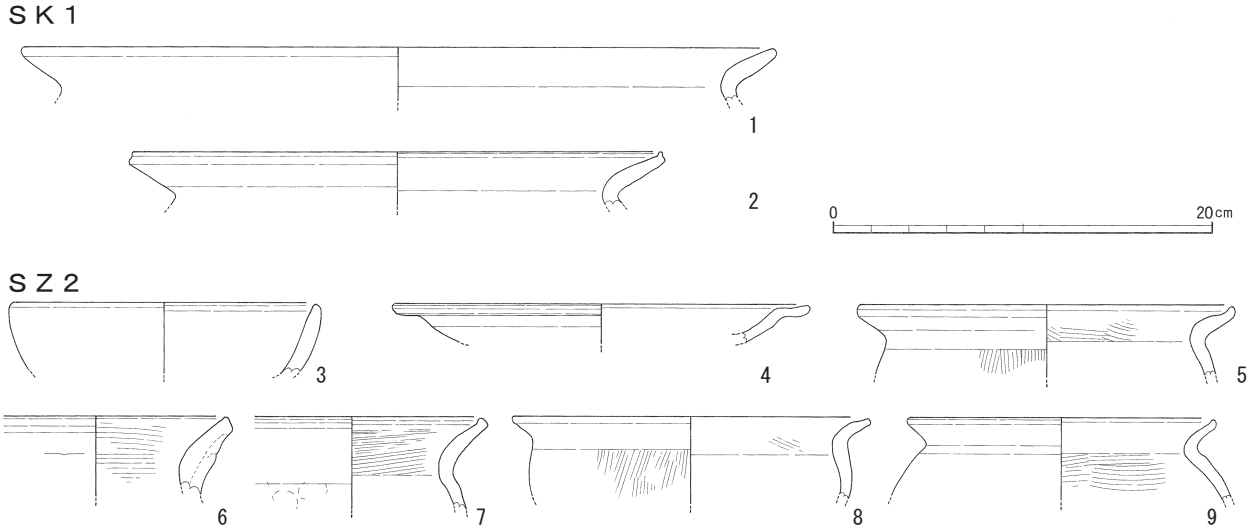


第４図　大林Ｂ遺跡調査区平面図（1：200）



1 アスファルト
2 砕石
3 5YR5/2 褐色混礫土＜客土＞
4 7.5YR1.7/1 黒色粘質土＜包含層＞
5 5YR4/2 褐色粘質土
6 10YR5/6 黄褐色粘土＜検出面＞
7 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
8 5Y8/1 灰白色粘土＜検出面＞
9 5Y7/2 灰白色粘土＜撹乱＞
10 N1.5/ 黒色土（土器を多量に含む）
11 ４と８の互層（土器を含む）＜ＳＺ２埋土＞

第５図　大林Ｂ遺跡調査区土層断面図（1：100）



第６図　大林Ｂ遺跡遺構出土遺物（1：4）

番号	実測番号	遺構	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
1	1-1	SK1	土師器 甕	40.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
2	1-2	SK1	土師器 甕	28.0	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
3	2-2	SZ2	土師器 杯	16.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
4	2-3	SZ2	土師器 高杯	22.0	—	—	—	橙5YR6/6	微砂粒含	口縁部1/12	
5	2-1	SZ2	土師器 甕	19.8	—	—	ハケメ	にぶい黄橙10YR7/6	1.5mmの砂粒含	頸部2/12	
6	1-3	SZ2	土師器 甕	—	—	—	—	にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の砂粒含	小片	
7	1-4	SZ2	土師器 甕	—	—	—	—	にぶい褐7.5YR6/3	1.5mm以下の砂粒含	小片	
8	1-5	SZ2	土師器 甕	18.8	—	—	ハケメ	にぶい黄橙10YR7/4	1.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12	
9	1-6	SZ2	土師器 甕	16.2	—	—	外面ナデ、内面ハケメ	にぶい橙7.5YR6/4	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
10	3-3	包含層	弥生土器 壺	—	—	底径 8.4	外面ハケメ	にぶい橙7.5YR7/4	やや精良	底部1/12	
11	3-4	包含層	土師器 蓋	—	—	—	—	橙5YR7/8	やや精良	小片	天井部外面に墨書。
12	6-7	包含層	土師器 椀	13.6	3.5	—	内面にヘラミガキ状の工具痕	浅黄橙10YR8/3	2mm以下の微砂粒含	2/12	粗製椀。
13	2-6	包含層	土師器 杯	17.6	3.7	—	底部外面一部ヘラケズリ	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒含	7/12	底部外面に沈線３条。
14	6-5	包含層	土師器 杯	14.6	2.9	—	底部外面ヘラケズリ	橙5YR7/6	精良	3/12	
15	2-5	包含層	土師器 杯	14.0	2.9	—	底部外面一部ヘラケズリ	橙5YR6/8	1mm以下の砂粒含	3/12	摩滅のため調整不明確。
16	6-6	包含層	土師器 杯	12.6	—	—	底部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ状の工具痕	橙5YR7/6	精良	1/12	
17	2-7	包含層	土師器 皿	18.0	2.8	—	—	橙5YR7/8	1.5mm以下の砂粒含	2/12	摩滅のため調整不明。
18	6-4	包含層	土師器 皿	17.8	2.2	—	—	橙5YR7/8	やや精良	1/12	摩滅のため調整不明。
19	2-4	包含層	土師器 皿	17.8	2.5	—	底部外面ヘラケズリ	にぶい橙7.5YR6/4	1.5mm以下の砂粒含	3/12	
20	6-2	包含層	土師器 皿	17.8	2.2	—	ナデ	橙5YR6/8	精良	1/12	
21	6-3	包含層	土師器 皿	17.8	2.1	—	—	橙5YR6/8	やや精良	1/12	摩滅のため調整不明。
22	6-1	包含層	土師器 盤	26.6	—	—	外面ヘラケズリ	橙5YR6/6	精良	口縁部1/12以下	
23	5-2	包含層	土師器 高杯	—	—	脚径 23.8	外面ハケメ	橙5YR6/6	やや精良	脚部1/12	
24	3-1	包含層	土師器 甕	24.8	—	—	ハケメ	にぶい橙7.5YR7/4	やや精良	口縁部1/12	
25	8-1	包含層	土師器 甕	—	—	体部径 20.5	外面ハケメ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙10YR7/4	3mm以下の砂粒含	体部4/12	
26	7-1	包含層	土師器 甕	26.6	—	—	外面ハケメ、内面下半ヘラケズリ	にぶい橙7.5YR6/4	3mm以下の砂粒含	体部4/12	
27	5-4	包含層	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面ヘラケズリ	にぶい橙7.5YR7/3	2mm以下の微砂粒含	底部3/12	
28	3-2	包含層	土師器 甕	21.6	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	やや精良	口縁部3/12	
29	8-2	包含層	土師器 甕	—	—	体部径 25.0	外面ハケメ、内面ヘラケズリ	にぶい橙7.5YR7/4	2.5mm以下の砂粒含	体部1/12	摩滅のため調整不明確。
30	4-1	包含層	土師器 甕	24.8	—	—	外面ハケメ、内面下半ヘラケズリ	浅黄橙10YR8/3	やや精良	頸部2/12	
31	5-3	包含層	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	2mm以下の微砂粒含	底部9/12	
32	5-1	包含層	土師器 甑	24.8	—	—	ハケメ	浅黄橙7.5YR8/4	やや精良	口縁部1/12	

第１表　大林Ｂ遺跡遺物観察表

第７図　大林Ｂ遺跡包含層出土遺物（1：4）

２．遺構

調査区は湧水があり、前述した様に調査区南端では激しい。このため調査は難航したが、若干の土坑を検出している。

ＳＫ１は直径70㎝程度の不整円形を呈するものであるが、深さは検出面から10㎝程度である。土師器の杯や甕の小片が出土している。同様な土坑を調査区北端でも検出しているが、深さが20㎝未満で西壁が袋状を呈している。遺物の出土は無い。

ＳＺ２は、調査区南端へ向けての谷状地形の始まりに相当するものと思われ、人為的なものでは無い可能性が高い。近隣の不定形な土坑と同様に水流の作用によるものかも知れない。土師器の杯・皿・甕が若干出土している。

なお、調査区中央部に土器の集中する個所がある。直径60㎝の円形に土師器の杯・皿・甕の小片が密集した状態であるが、遺構は形成していない。今回の調査で出土した遺物の大半は、ここからのものである。全て小片であり、１個体が潰れた様子もない。

３．遺物

（１）ＳＫ１出土遺物

土師器の杯、甕が出土しているが、図示できたものは土師器甕１と２である。両者とも口縁部の小片のため詳細は不明であるが、口縁部から頸部にかけての肥厚が若干残る。口縁部の形状は１が端部を丸く収めるのに対し、２は端部を摘まみ上げ、外面に面をもつ。面は凹線状を呈している。

（２）ＳＺ２出土遺物

３は土師器の杯、４は高杯、５～９は甕である。３は器壁が厚く、口縁端部内面に弱い沈線を施す。暗文やヘラミガキは確認できなかったが、斎宮の第１期[①]に並行するものと考えられ、８世紀の奈良時代のものであろう。共伴する甕もそれと矛盾はないもので、５は口縁部から頸部にかけて肥厚し、７は口縁端部外面に明瞭な面をもつ。６も同様であるが、口縁部の接合が雑なために極端に肥厚し、形態を崩している。９は外面のハケメが確認できず、異色である。

（３）包含層出土遺物

10は弥生土器または古式土師器の壺の底部で、外面の調整はヘラミガキではなくハケメである。

11は土師器の蓋の小片であるが、天井部外面に墨書がある。複数文字または絵画の可能性がある。

12は粗製の椀であるが、内面にはヘラミガキ状の工具痕が僅かに観察される。

13～16は土師器の杯で、いずれも底部外面をヘラケズリで調整する。16の内面にはヘラミガキ状の工具痕が僅かに観察されるが、他のものに暗文またはヘラミガキは確認できない。13の底部外面には鋭利な工具による３条の沈線が焼成前に施されている。

17～21は土師器の皿で、口径18㎝、器高は２～３㎝に収まる。摩滅のため調整が不明瞭なものもあるが、底部外面をヘラケズリするものとナデで収めるものがある。

22は盤、23は高杯の脚部片である。22外面のヘラケズリは、口縁部直下に及ぶ。23の外面にはハケメが残る。

24～31は土師器の甕、32は甑である。27・30の底部片を除き甕は全て長胴甕である。この状況から27・30も長胴甕の底部片の可能性が高い。30の口縁部片と体部片は接合できなかったが、同一個体と判断した。口縁部は外に面をもつものであるが、28・30は水平まで大きく外反する。外面をハケメ、内面の下半をヘラケズリで調整するが、25・28・29は体部上位まで及ぶ。また、28・31のヘラケズリは浅く、工具ナデとなる。（森川）

［註］

① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月

Ⅳ．長五郎林Ｂ遺跡

調査区は開析谷の先端部付近に相当するが、既述したように残土により谷が埋められた現況を呈する。僅か35㎡の調査であったが、谷の東側緩斜面に相当する位置から遺構・遺物を検出している。

１．層序

調査区は逆Ｌ字状を呈する。南東から北東へ延びる部分では、前述したように厚い客土に覆われている。最大２ｍの客土の下が、明黄褐色粘土の検出面となり、他の層序は削平により消滅している。調査区南西端では、攪乱が検出面を削平しており、崩落の危険もあるため２ｍ以上の掘削を断念した。ただし、谷の中心部に向かう方向であるため、検出面も徐々に深くなっていくことが想定できる。

一方、南北に延びる部分では、比較的層序が残存していた。やはり客土に覆われるが、客土は概ね１ｍの厚さである。その下のにぶい橙色土で遺構検出を行ったが、さらに２層下に黒褐色粘質土の包含層が存在し、その下で下層検出面である明黄褐色粘土に至る。包含層までは地表から1.4ｍ、検出面までは約1.6ｍである。

２．遺構

（１）上層検出遺構

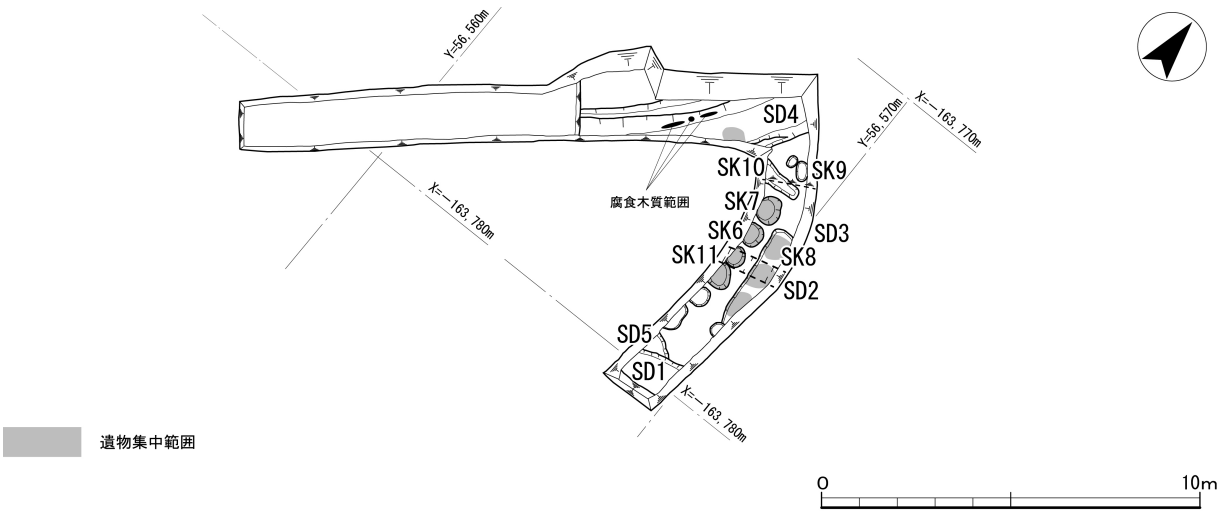
客土直下の上層検出面では、重複する２条の溝を検出した。ＳＤ２は幅50㎝、検出面からの深さ20㎝未満の小規模なものである。ＳＤ３はＳＤ２と南岸を共有し、幅３ｍ以上を確認したが、北岸は撹乱により消滅している。深さは検出面から40㎝程度で、幅に比べ浅いものである。ＳＤ２からは常滑の陶器片等の小片、ＳＤ３からは古墳時代の壺等の小片が出土している。これにより、ＳＤ２は室町時代以降の時期が与えられる。ＳＤ３も層位からみて同等な時期と考えられ、出土した遺物は、丘陵上に分布する垣場古墳群からの混入と思われる。両者とも丘陵上から谷の中心部に向かって延びており、排水目的または流路の可能性が高い。ＳＤ３の埋土断面の観察では、ＳＤ２の他にも小規模な溝の重複がある。これを含め、ＳＤ２はＳＤ３が埋没する最終形態を示すものかも知れない。

（２）下層検出遺構

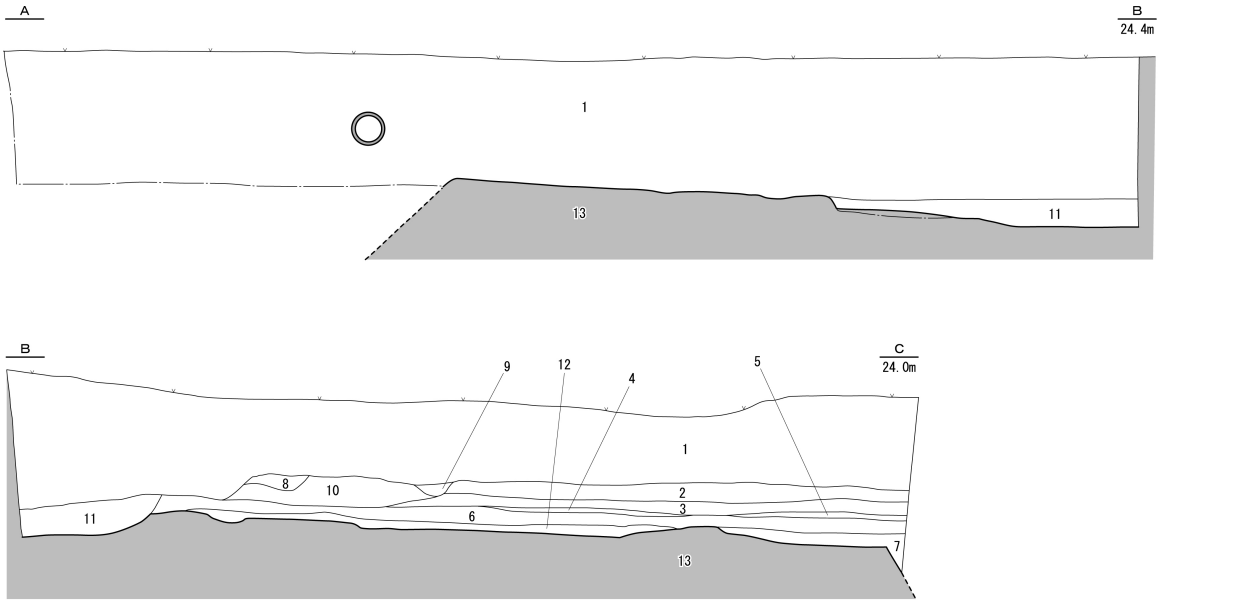
今回の調査区で中心となる検出面である。遺構は、谷の東側緩斜面に相当する位置で溝や土坑が検出された。いずれのものからも奈良時代の遺物が出土しているが、古墳時代の須恵器等の混入も多い。これは、上層検出遺構と同様に垣場古墳群からの混入と思われる。ＳＤ１は、掘削の結果自然の傾斜と判断できた。ＳＤ５もＳＤ１と一連の可能性がある。

ＳＤ４　幅1.6ｍ、検出面からの深さ20～30㎝の比較的整った溝である。丘陵から谷の中心部へ向かって延びるが、若干弯曲するようにも見える。地形的に排水機能が想定できるが、埋土は粘土で砂粒はない。比較的多くの遺物が出土しているが、出土状況が特徴的である。溝南岸の一部に遺物が集中する。径40㎝程度の円形範囲に土師器や須恵器の小片が密集した状態で埋没していた。出土した遺物は、接合の結果においても残存は劣悪で、特定の遺物が潰れた状態ではない。ＳＤ４出土遺物の大半がこの部分からの出土である。また、溝の北岸斜面では、腐食の激しい木質部を検出している。径10㎝程度の円形が１個、同様な径で長さ40㎝程の棒状のものが２個である。

ＳＫ６～１１　ＳＫ６・７・11を含め直径40～60㎝、深さ20㎝未満の小規模な土坑が調査区西側壁に沿って縦列に６基並ぶ。ＳＫ11は掘削の結果、２基の土坑に分かれた。反対側の調査区東壁で検出したＳＫ９も同様な状況である。調査区東壁に沿うＳＫ８は、検出時では３～４基の土坑が縦列に並ぶ状況であったが、土坑壁が不安定で、結果的に溝状のものとなった。全体として、ＳＫ10を含め同様な規模の不安定な土坑が縦列に２列、約１ｍの間隔を空け並ぶ状況となった。遺物の出土状況も特徴的で、ＳＫ６・７・11には土師器や須恵器の小片が密集した状態で出土した。ＳＤ４と同様に接合後においても残存は劣悪な小片である。ＳＫ８でも同様な状況がみられ、３ヶ所の遺物小片の集中があり、検出当

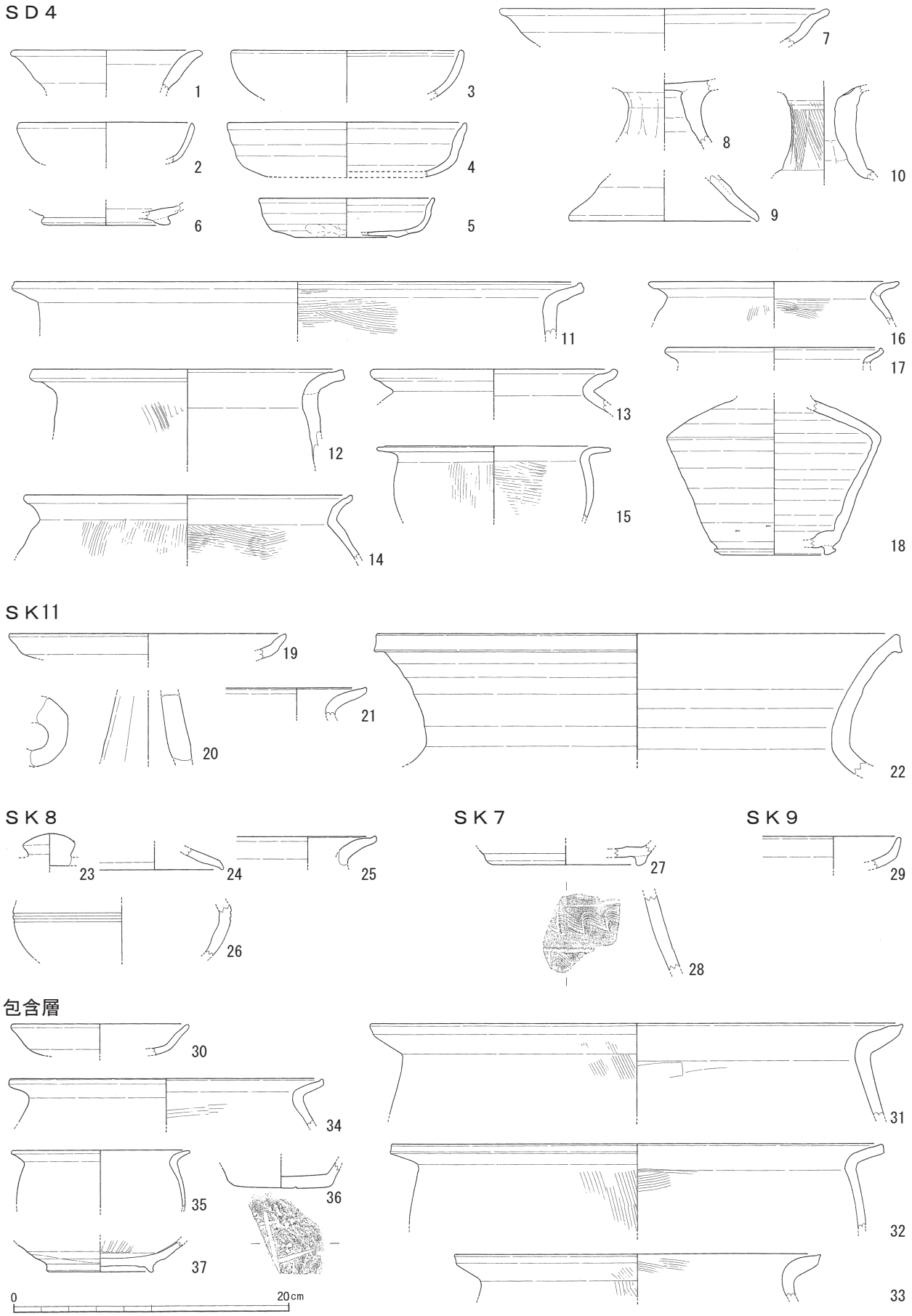


第８図　長五郎林Ｂ遺跡調査区平面図（1：200）



1　客土
2　7.5YR7/3 にぶい橙色土＜上層検出面＞
3　2.5Y7/2 灰黄色粘質土
4　2.5Y5/1 灰黄色粘質土
5　2.5Y8/1 灰白色粘土
6　2.5Y3/1 黒褐色粘質土＜包含層＞
7　2.5Y7/4 浅黄橙色粘質土＜ＳＤ１埋土＞
8　10YR3/2 黒褐色土
9　10YR4/1 褐灰色土＜ＳＤ２埋土＞
10　10YR7/3 にぶい黄橙色土＜ＳＤ３埋土＞
11　10YR5/6 黄褐色粘土（7.5Y5/6 明褐色粘土少量含）＜ＳＤ４埋土＞
12　10YR7/3 にぶい褐色粘質土＜ＳＫ８埋土＞
13　2.5Y6/6 明黄褐色粘土＜検出面＞

第９図　長五郎林Ｂ遺跡調査区土層断面図（1：100）



第10図　長五郎林Ｂ遺跡包含層出土遺物（1：4）

番号	実測番号	遺構	器種器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
				口径	器高	その他					
1	2-4	SD4	土師器壺	13.3	—	—	—	橙5YR7/6	微砂粒含	口縁部1/12	
2	3-3	SD4	土師器椀	12.7	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12	摩滅のため調整不明。
3	3-5	SD4	土師器杯	16.6	—	—	—	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12	摩滅のため調整不明。
4	1-5	SD4	土師器杯	17.3	4.0	—	底部外面未調整	にぶい橙5YR7/4	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部3/12	
5	2-5	SD4	土師器杯	12.7	2.9	—	底部外面未調整	にぶい橙7.5YR6/4	2mm以下の砂粒含	口縁部6/12	
6	3-6	SD4	土師器杯	—	—	高台径8.4	—	にぶい橙5YR6/4	1mm以下の砂粒含	高台2/12	
7	2-1	SD4	土師器高杯	23.6	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	2mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/12	
8	3-7	SD4	土師器高杯	—	—	脚基部径5.3	外面ヘラケズリ	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒含	脚柱部完存	
9	2-3	SD4	土師器高杯	—	—	脚底部径13.7	—	にぶい橙7.5YR7/4	1.5mm以下の砂粒・赤色粒含	脚底部2/12	
10	3-8	SD4	土師器高杯	—	—	脚部径4.7	外面面取り状のハケメ	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒・赤色粒含	脚部7/12	
11	1-3	SD4	土師器甕	41.4	—	—	内面ハケメ	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
12	2-2	SD4	土師器甕	22.4	—	—	外面ハケメ	にぶい黄橙10YR7/3	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
13	1-4	SD4	土師器甕	17.6	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12	剥離が激しい。
14	1-2	SD4	土師器甕	23.8	—	—	ハケメ	浅黄橙10YR8/3	3mm以下の砂粒含	口縁部1/12	摩滅が激しい。
15	3-2	SD4	土師器甕	17.6	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	2.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12	摩滅が激しい。
16	3-1	SD4	土師器甕	18.0	—	—	ハケメ	にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の砂粒含	口縁部2/12	摩滅が激しい。
17	3-4	SD4	土師器甕	15.6	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12	
18	1-1	SD4	須恵器壺	—	—	高台径7.4	体部外面下端ロクロケズリ	灰黄2.5Y7/2	4mm以下の砂粒含	体部以下3/12	外面に自然釉が掛かる。
19	5-2	SK11	土師器高杯	20.1	—	—	—	橙7.5YR7/6	微砂粒含	口縁部1/12	
20	5-3	SK11	土師器高杯	—	—	脚部径5.4	脚部外面ヘラケズリ	橙5YR6/8	精良	脚柱部6/12	
21	5-1	SK11	土師器甕	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	精良	小片	
22	5-4	SK11	須恵器甕	38.2	—	—	—	灰N5/	精良	口縁部1/12	
23	4-6	SK8	土師器蓋	—	—	摘み径3.7	—	橙2.5YR6/6	微砂粒含	摘み9/12	
24	4-3	SK8	土師器高杯	—	—	—	—	橙7.5YR7/6	精良	小片	
25	4-5	SK8	土師器甕	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	1mmの砂粒含	小片	
26	4-4	SK8	須恵器甑	—	—	体部径15.9	—	灰白N8/	精良	体部2/12	刺突文＋沈線。
27	4-1	SK7	須恵器杯	—	—	高台径10.5	ロクロナデ	灰N6/	精良	底部1/12	
28	4-2	SK7	須恵器器台	—	—	—	ロクロナデ	灰白5Y7/1	精良	小片	波状文＋沈線。
29	4-7	SK9	土師器皿	—	—	—	ナデ	橙2.5YR6/8	微砂粒含	小片	
30	7-3	包含層	土師器杯	12.8	—	—	ナデ	橙2.5YR6/8	精良	口縁部1/12	
31	6-1	包含層	土師器甕	38.6	—	—	外面ハケメ、内面ナデ	浅黄橙10YR8/3	精良	口縁部2/12	
32	6-2	包含層	土師器甕	35.6	—	—	外面ハケメ、工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	1mmの砂粒含	口縁部2/12	
33	6-3	包含層	土師器甕	26.6	—	—	外面ハケメ、ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	微砂粒含	口縁部1/12	
34	7-1	包含層	土師器甕	22.8	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	精良	口縁部1/12	
35	7-2	包含層	土師器甕	12.9	—	—	—	橙2.5YR7/6	精良	口縁部3/12	剥離が激しく調整不明。
36	7-5	包含層	須恵器杯	—	—	底径6.8	底部外面未調整	灰白N7/	精良	底部3/12	底部外面に沈線による記号。
37	7-4	包含層	施釉陶器皿	—	—	高台径7.4	底部外面ロクロケズリ	灰白10YR8/2	精良	底部4/12	灰釉。内面に刻文。

第２表　長五郎林Ｂ遺跡遺物観察表

初、数基の土坑に分かれていたことに対応する。ＳＫ９やＳＫ10をはじめ他の土坑では、こうした状況はみられない。

３．遺物

（１）ＳＤ４出土遺物

比較的まとまった出土があったが、５を除き小片である。18は須恵器の壺で、肩の張る体部である。他は全て土師器で、１は壺、２は粗製の椀、３～５は杯、７～10は高杯、11～17は甕である。４・５の底部外面にはヘラケズリが認められず、未調整となる。口縁端部も外反気味である。それに対して３は内弯する口縁部で端部内面に沈線を巡らせる。６は壺の高台の可能性もあるが、底部内面の丁寧なナデにより杯としておく。高杯の脚柱部は短く、外面をヘラにより面取りするが、10はハケメ状の工具による。

これらの時期としては、杯の底部外面にヘラケズリが認められないものの高杯の脚部は伸長しておらず、斎宮の第Ⅰ段階[①]に止まるものと思われ、奈良時代末の８世紀末頃と考えられる。そうした場合、１は前代からの混入となる。

（２）ＳＫ１１出土遺物

19・20は土師器の高杯、21は甕、22は須恵器の甕で、全て小片である。20の脚柱部外面はヘラにより面取りされる。しかし、脚柱部の中心が内径と外径で異なり、結果として脚柱部の厚みが場所によって大きく異なる雑な作りになっている。

（３）ＳＫ８出土遺物

土師器の小片が多数出土しているが、図示できたものは土師器の蓋（23）、高杯（24）、甕（25）、須恵器の瑕（26）である。26の体部には２本の沈線が巡り、その上部に櫛による刺突文が僅かに観察できる。施文順は、刺突文→沈線である。

（４）ＳＫ７出土遺物

土師器や須恵器の小片が多数出土しているが、図示できたものは須恵器の杯（27）と器台（28）である。器台の外面は波状文と沈線で装飾される。

（５）ＳＫ９出土遺物

土師器や須恵器の小片が出土しているが、図示できたものは29の土師器の皿のみである。底部外面はナデで調整し、ヘラケズリはみられない。口縁部の内弯傾向は無いが、器壁は厚い。

（６）包含層出土遺物

30は土師器の杯、31～35は甕、36は須恵器の杯、37は施釉陶器である。30の口縁部は外傾するが器壁は厚く、斎宮のⅡ－２期[②]までに収まるであろうか。いずれにしても平安時代前期の９世紀に下るものである。土師器甕の内面もハケメによる調整と思われるが、工具の当たりが浅く、ナデと観察せざるを得ないものが多い。36の底部外面にはヘラによる深い鋭利な沈線が刻まれている。残存部のみで判断すれば、「ｋ」と思われる。37の内面には、丸ノミ状工具による刻文が施される。おそらく折縁皿になるものと思われ、室町時代の大窯期、16世紀に下る[③]ものであろう。（森川）

［註］

① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ内院地区の調査』平成13年3月31日
斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月

② 前掲①に同じ

③ 瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市　平成5年9月30日

V．結　語

今回の調査は、両遺跡とも狭小な調査区であり、さらに調査区が遺跡の縁辺部に位置することから、両遺跡の性格を明らかにすることはできなかったが、その一端を垣間見ることはできたものと思われる。そのなかで、長五郎林Ｂ遺跡で検出した連続する２列の土坑群が注目され、「波板状凹凸面」と称されるものに含まれるものと思われる。

波板状凹凸面は、約0.7m間隔で楕円形や円形または不整円形等の土坑が連続し、土坑底は平坦なもので、小礫を充填するものもある[①]という。こうした特徴は、小礫の代わりに土器片を充填したものと解釈すれば、長五郎林Ｂ遺跡の土坑群と合致するものである。波板状凹凸面は道路遺構で見つかる[②]とされることから、今回の調査は道路遺構を検出したものと考えられる。伊勢地域の波板状凹凸面を伴う道路遺構を集成した川部氏の分類によれば、典型的な事例ではないものの、Ⅱ種Ｃ類型[③]に該当するものと思われ、古代官道やその近辺の位置環境にある道路からは、低い位置付けとなるようである。

今回の調査原因となる事業は、宮川用水から分岐する農業用パイプラインを設置するもので、農道の下に埋設される。したがって、今回の両遺跡の調査区も農道に設定された。大林Ｂ遺跡から丘陵裾野を北上し、有爾桜神社鳥居前に至る。そこで方向を変え、谷を横断して、反対側の丘陵裾野を北上し、開析谷の最も奥に所在する長五郎林Ｂ遺跡に至る農道である。既述したように大林Ｂ遺跡は奈良時代の８世紀、長五郎林Ｂ遺跡はやや下って、奈良時代末の８世紀末とした。現在の農道とは大きく時期が隔たるが、第11図に示すように昭和23年撮影の空中写真にこの農道は撮影されている。これ以前に大規模な地形変更を伴う土木工事は想定し難く、この農道が奈良時代まで遡る可能性はあるものと推測される。

空中写真には、整然と並ぶ棚田が撮影されており、農作業用の道路としての機能が想定されるが、棚田が奈良時代まで遡ることは不確定である。一方、奈良時代の当地域は土器焼成坑の密集地帯である。長五郎林Ｂ遺跡が発見される契機となった調査においても土器焼成坑が新発見されている[④]。こうしたことからも、周辺の丘陵緩斜面には、まだ知られていない多くの土器焼成坑が埋蔵されていることが容易に想定できる。こうした土器焼成作業に伴う資材や製品の運搬等には道路が必要であり、これもそのひとつの可能性がある。このことは、前述した川部氏の分類に当てはめた結果と矛盾しない。

この道路が土器焼成作業に伴う運搬のためのものとすれば、この連続する土坑群の正体は如何なるものであろうか。波板状凹凸面の正体については諸説あり、結論に至っていない[⑤]ようである。長五郎林Ｂ遺跡のものは約１mの間隔で２列並ぶ状況から、車輪の轍に起因するものと想定したい。兵庫県の吉田南遺跡からは奈良時代の車輪が出土している[⑥]こともあり、当地域でもこの時期に荷車が使用されていた可能性がある。当地は粘土質であり、轍による泥濘の発生は容易に想定できる。現在でも未舗装の農道で発生する轍を起源とする水溜まりの簡易な補修を、礫で埋めることが普通に行われている。しかし、当地域では前述したように粘土質であり、礫の入手は容易ではない。多数の土器焼成坑を検出した北野遺跡では、失敗品等を捨てた土坑が検出されている[⑦]。土器焼成においては、この様な廃棄物が多量に生じたものと思われ、泥濘に対する身近な補修材として利用されたのではないだろうか。ただし、この土坑群が轍の集積の結果なのか、泥濘を除去し土器片を充填する作業で生じた痕跡なのかは定かでない。補修痕の重複が無いのは、主要道路ではないため荷車の往来が限定的であったためと思われる。また、土器焼成坑が９世紀には急減する[⑧]ため、この道路の使用期間も短かったことも一因であろう。したがって、この程度の補修で十分使用期間に対応できたものと思われる。

なお、土器片の集積は同時期のＳＤ４でもみられる。ＳＤ４は谷の中心部へ向かうことから埋土に砂粒を含まないものの排水用として機能した可能性がある。この南岸に土器片の集積があるが、対岸には腐食した木質がみられた。調査区が谷の最も奥にあ

たる地形から、この部分で道が分岐し、西に向かう道がＳＤ４を横断していたものと想定したい。おそらく板または丸太を簡易な橋桁として渡っていたのではないだろうか。木質部はその痕跡であり、対岸の土器片の集積は荷重に対する溝岸や橋の強化を目的とした補修と解釈したい。

この様に解釈した場合、大林Ｂ遺跡で検出した土器片の集積も同様な道路の補修とみることができる。そして土器焼成作業が終息した後は、有爾桜神社への参道を兼ねた農作業用の道路として今日まで細々と存続し続けているものと思われる。

以上、推測に推測を重ねた結果ではあるが、今回の調査は土器焼成作業に使用された名も無き道路の一端を垣間見た結果と言えるのではないだろうか。

（森川）

［註］

① 川部浩司「波板状凹凸面からみた伊勢地域の道路遺構」『Mie history vol.21』三重歴史文化研究会 2012年5月

② 近江俊秀『道路誕生―考古学からみた道づくり』青木書店 2008年3月21日

③ 前掲①に同じ

④ 小山憲一「長五郎林Ｂ遺跡」『宮川用水第二期地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ　外山遺跡・片落Ｃ遺跡』三重県埋蔵文化財センター 2000.3

⑤ 前掲②に同じ

⑥ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録』1984

⑦ 上村安生ほか『北野遺跡（第２・３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995.3

⑧ 上村安生「明和町北野遺跡の土師器生産と神宮・斎宮」『瑞垣250』神宮司庁　令和３年秋季号

第11図　昭和23年撮影の空中写真（国土地理院空中写真ＵＳＡ-R2303-61　昭和23年12月17日撮影）

大林Ｂ遺跡調査前風景（南東から）

大林Ｂ遺跡調査区北半全景（南から）

大林Ｂ遺跡調査区南半全景（南から）

12

13

14

13

15

17

21

19

11

大林Ｂ遺跡出土遺物

大林Ｂ遺跡出土遺物

長五郎林Ｂ遺跡調査区南部全景（北から）

長五郎林Ｂ遺跡調査区西部全景（北東から）

23

4

10

5

6

8

14

長五郎林Ｂ遺跡出土遺物

長五郎林Ｂ遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおばやしびーいせき・ちょうごろうばやしびー(だいにじ)はっくつちょうさほうこく
書　　名	大林Ｂ遺跡・長五郎林Ｂ遺跡(第２次)発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	４０９
編著者名	元座範子　森川常厚
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2022(令和４)年２月

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおばやし いせき 大林Ｂ遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょううになか 明和町有爾中	24442	196	34度 31分 19秒	136度 36分 57秒	20201216 ～ 20201217	23㎡	県営かんがい排水事業有爾中・明星地区
ちょうごろうばやし いせき 長五郎林Ｂ遺跡		24442	704	34度 31分 10秒	136度 36分 58秒	20210218 ～ 20210219	35㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大林Ｂ遺跡	散布地	奈良	土坑	土師器	遺物小片の集中個所あり
長五郎林Ｂ遺跡	散布地	奈良末	溝・連続土坑	土師器　須恵器	連続土坑は波板状凹凸面

要約

大林Ｂ遺跡・長五郎林Ｂ遺跡は、玉城丘陵の裾野または緩斜面に位置する。長五郎林Ｂ遺跡では、連続する小土坑を検出し、波板状凹凸面をもつ道路遺構と思われる。補修に使用されたと思われる土器の細片が充満するものがある。土器片の集積は大林Ｂ遺跡でも検出した。

三重県埋蔵文化財調査報告４０９

大林Ｂ遺跡・長五郎林Ｂ遺跡（第２次）発掘調査報告

２０２２（令和４）年２月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社